



世界ハラール評議会総会報告

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程 大木博文

はじめに

平成19年11月23日から同29日まで、世界ハラール評議会総会に出席のため、拓殖大学イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員長・武藤英臣客員教授、同委員・遠藤利夫先生と、同研究員の肩書きで大木博文の3名がマレーシア国へ行ってきました。ハラール認証に関しては、拓殖大学イスラーム研究所は、宗教法人日本ムスリム協会と連携して行っているため、私たちは宗教法人日本ムスリム協会をも代表して参加したことになります。今回マレーシア行き第一目的は、世界ハラール評議会総会出席でしたが、その他にもハラール認証に関連してハラール屠場の見学と、「マレーシア国連邦政府総理府・イスラーム開発局」(通称JAKIM) 訪問も行いました。

世界ハラール評議会総会

11月25日から27日までの3日間、マレーシア国セランゴール州ペタリンジャヤのワンワールド・ホテル・クアラランブルを会場にして、世界ハラール評議会の第7回総会が開催されました。同総会は平成12年にインドネシア共和国の首都ジャカルタで第1回が開催されました。昨年は諸事情があって開催されず、今年も開催候補地を二転三転させた後、アメリカ・イスラーム食品・医薬品研究所(IFANCA)を中心とするアメリカのハラール認証団体の尽力によって、ようやく開催の運びとなりました。アメリカからは5団体が今回の総会に参加しました。各団体の代表が一致協力して、今回の総会が実現したのです。マレーシア側でも総会開催に尽力された方は、IFANCAの東南アジア支部代表を務めるマレーシア人のアブドラー・ファヒーム氏でした。

事前の参加申し込みは31団体から53名となっていました。開会式での公式発表では、今回の総会参加の団体・個人総数は、26団体から65名となっていました。前回のケーブタウンでの総会には100名を超える参加者が集まりましたが、この時期はマレーシア国内でもハラール関連の会議やセミナー等が連続して開催され、周辺諸国でも関連会議が開催されるということで、参加者数も少なくなっていました。いつも世界ハラール評議会の総会に参加していた者でも、今回は別の会議で講演することになっているので欠席するとか、代理人を派遣するとかと、いろいろ調整していたそうです。

総会開催の2日前から、世界各地のハラール認証団体の代表たちが会場のホテルに入ってきました。会場となったワンワールド・ホテル・クアラランブルは、つい4ヶ月ほど前の7月7日にオープンしたばかりの新しいホテルで、地元の人たちでも知らない者は多くいました。ホテルの名称は「クアラランブル」となっていますが、実際にはクアラランブルに隣接し、その開発に応じて発展したペタリンジャヤの郊外に位置しています。マレーシアの国営放送の一つで数年前に日本のイスラーム活動の取材のため拓殖大学イスラーム研究センター(当時)を訪問したTV3や、ジャスコに隣接しています。首都クアラランブルの中心まで、車で20~30分くらいの距離があります。

私たちも2日前の23日夜に会場入りしました。宗教法人日本ムスリ

ム協会は、特にゼラチンの国際ハラール基準作りに関わっています。会場入りした夜から、同じゼラチン委員会のメンバー2名と会い、簡単な意見交換をしておきました。ゼラチンは、ハラール認証に関連して、特に問題の多い製品の一つです。今回の総会で議論する時間がなかったとしても、今後も必ず取り上げられることになるテーマなので、これからも時間をかけてじっくり意見交換し、ゼラチンについてのレポートをまとめていくことになりました。

翌24日も朝食時から参加者が集まって今回の総会についてのホットな意見が出ました。この時の意見の多くは、今回の総会用に作成提出された憲章ドラフトの内容についてのものでした。午後1時過ぎに今回の総会を準備したアブドラー・ファヒーム氏が会場のホテルに来て、総会スケジュールの説明の後、レジストレーションを行いました。

今回の総会の主題は、南アフリカ共和国のケーブタウンで開催された前回の総会で継続審議となったいくつかの事案について、それぞれ責任者のもとで担当者が協力してまとめた報告の発表と、それに基づく意見交換です。特に世界ハラール評議会憲章とその施行細則、ハラール認証の国際基準は、今回の総会で採択することが決まっていたため、予定以



会議参加者集合写真

上に多くの時間を割いて集中的に議論する必要があることが、この時に確認されました。

今までの総会でも、ハラール認証の国際的な統一基準を作成するという評議会本来の目的の実現に向けて、各ハラール認証団体の代表者たちが積極的に意見交換を重ねてきました。こうした今までの積み重ねの上に、今回の総会では憲章も最新の修正案が作成され、何とか評議会としての統一基準を作ろうという主催者側の意気込みが感じられました。会員団体のみの参加といっても、今回初めて参加する団体もありました。こうした事実も、世界的にハラール認証をめぐるムスリムたちの動きが活発になってきていることを如実に物語っていま

した。

このような経緯があって、今回の総会は事前に手渡された予定とは大きく異なったものとなりました。初日開会の司会は、今回の総会開催をアレンジしたアブドラー・ファヒーム氏が担当し、午前中には、世界ハラール評議会議長アーイシャ・ギリンドラ博士による開会宣言、同評議会事務局長ムハンマド・サーディク博士による前々回のジャカルタ総会(2004年)と前回のケーブタウン総会(2005年)についての総評、収支報告を行いました。発表内容としては大きな問題はなく、設立から今までの世界ハラール評議会の略史と今回の総会出席者紹介を中心とした説明がありました。その中で特に強調したい点として、今までの総会での議論や意見交換を基にし、過去の経緯を振り返りながら将来を見据えた総会にするように参加者が各自努力してほしい、という問いかけがありました。

始まりから1時間ほど予定時間より遅れ、途中でも異議や質問などが噴出して、波乱含みの出だしとなりました。

午後の部は分科委員会の代表者による発表が行われました。まずアメリカ合衆国のオマハ・ハラール実践事務所のアハマド・アルアブスィー所長による食肉屠畜用家畜の気絶と屠畜の方法についての報告がありました。これはパワーポイントを使ったプレゼンテーションで分科委員会

の委員たちの意見をまとめたレポートというよりも、オマハ・ハラール実践事務局が承認しているハラール屠畜の紹介といったような内容でした。ニワトリについて自動カッターによる大量処理を説明した際には、イスラーム的に一羽ずつ手で処理すべきではないかとか、ハラール屠畜の条件であるバスマラ（その意味は「慈悲深く、慈愛あまねくアッラーの御名によって」とタクビール「アッラーは至大なり」という意味のアラビア語の定型句を言うことであるが、ムスリムの食用のために認められた家畜を屠畜する場合、イスラームの教えに従ってムスリムが家畜の頸に一刀を入れる直前に、その家畜に向かってこの定型句を唱えることが求められている。）はどうするのか、という質問も出ました。

この時点で既に初日会議の終了予定時刻近くになっていましたが、休憩をはさんで残り一つの報告が行われました。発表者はハラール認証オーソリティー・オーストラリアのムハンマド・エルモウエルビー氏で内容は、香料と添加物についてでした。ハラール製品の製造に使われる原材料について詳細な科学的分析を加えた説明がなされました。

発表者が今回の総会について開会時より積極的な発言をしていたためか、または参加者が既に疲れていたためかわかりませんが、大した質疑応答もなく、初日の会議は予定の4時半を大幅に超えて、6時に終了しました。

晩餐会は予定では夜8時からということでしたが、会議が長引いたため、夜9時に始まりました。朝からの熱のこもった会議で疲れた人が多かったのか、後から遅れて来場した人も含めて、47名が会場に集まりました。会議初日の全スケジュールが終了したのは、夜11時でした。

二日目は憲章の採択を最優先して、スケジュールが大幅に変更となりました。憲章の採択に向けて参加者が積極的な意見を交換していくうちに、会場が一時騒然となるようなこともありました。そうした混乱が一気に収束したのは、他でもない、司会者の提案で参加者の一人が朗読したクルアーンの中の短い一章でした。彼はゆっくりと朗読を始めました。

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において。

われは、あなたの胸を広げなかったか。あなたから重荷を降ろしたではないか。それは、あなたの背中を押し付けていた。

またわれは、あなたの名声を高めたではないか。

本当に困難と共に、安楽はあり、本当に困難と共に、安楽はある。

それで（当面の勤めから）楽になったら、更に労苦して、（只一筋に）あなたの主に傾倒するがいい。

（クルアーン第94章「胸を広げる章」）

ムスリム自身わかっているつもりでいても、自己主張を押し通そうとしたり、論争相手に対して優位に立とうとしたりすると、イスラームの基本的な教えを忘れがちになります。クルアーンの中には、つまりイスラームにはどんな問題でも解決する道があるということを実に物語る一幕でした。

最終的には会員資格や役員の任期等について若干の変更が行われた程度で、その他には大きな変更箇所もなく、評議会憲章、施行細則、認証の国際基準共に基本的な採択に達し、いよいよ役員の選挙に入ることになりました。選挙方法をめぐって若干のトラブルが発生しましたが、ともかく選挙も無事に終わりました。今まで8年間に亘って世界ハラール評議会の設立からリーダーシップを取ってきた議長のアーイシャ・ギリンドラ博士、事務局長のムハンマド・サーディク博士ともに第一線を退くことになり、議長・事務局長ともに入れ替わった世界ハラール評議会は、新しい議長、事務局長、執行部の基で次回の総会へ向けて新たな一歩を踏み出すことになりました。尚、この選挙で当研究所の武藤シャリア委員会委員長が9人いる執行部の一人に選ばれたほか、シャリア委員会のメンバーにも選ばれました。また遠藤先生が選挙管理委員会のメンバーに選ばれています。

新しい組織が出来上がったことが、今回総会の最大の成果でした。新体制の下では、アーイシャ・ギリンドラ博士の後任として、インドネシア共和国イスラーム学者評議会付属食品・医薬品・化粧品検査研究所（LPPOM-MUI）の所長に就任したムハンマド・ナドゥルトツザマン博士が世界ハラール評議会の議長に、そして憲章作成に尽力したフィリピンのアブドゥラハマー・リンザグ氏が事務局長に、それぞれ就任しました。

また新執行部の下、メンバーシップ委員会、技術委員会、シャリア委員会、調停委員会、選挙管理委員会がそれぞれの役割を分担担当して、次回総会の開催に向けて準備を進めていくことになりました。

ハラール屠場見学

近年、日本国内でも和牛や鶏にハラール認証を取得したいという声が上がってきています。しかしながら海外に出しても信頼されるようなハラール認証を出すためには、いろいろとクリアしなければならない問題が山積みになっています。マレーシア出張の機会に、実際のハラール専用屠場を見学し、責任者や担当者の方々にインタビューし、ハラール・ミートに必要な技術と方法、手順、審査のポイント等を勉強することになりました。

世界ハラール評議会総会が終わった翌日の28日は、早朝から大忙しに動き回らなければならなくなりました。遠藤先生と私は、RISEAPのイスラーム教育担当官のユースフ少佐の迎えを受けて朝8時にホテルを出て、高速道路を自動車で約1時間走り、首都のクアラ Lumpur 特別行政区に隣接するセランゴール州の州都・シャアラムという産業都市に行きました。ここはマレーシア日本の企業も多数進出していて、日本人もたくさん住んでいるところです。中心部を抜けてしばらく行くと清閑な郊外に出ました。

そんなところに「セランゴール州家畜サービス局本部」という大きな看板を持つ屠畜場がありました。見た目にも手入れが行き届いていない古ぼけた建物が、広大な敷地のあちらこちらに点在しています。今から30年以上前の1974年に、当時の首相であった（マレーシア国第2代）アブドゥラッザークの決断で建設された同国最古の公営屠場だとの

ことです。営業目的ではなく、純粋にサービスのためだけに家畜を屠畜するために建築されたそうです。そのため依頼がなければ屠畜をしないとのこと。一頭も屠畜しないという日が何日か続くということもあるそうです。また屠畜依頼人の宗教と家畜の種類ごとに屠畜棟が分かれていました。中華系マレーシア人が豚の屠畜を依頼することもあるそうですが、その場合の屠畜場所は、ムスリムが牛の屠畜を依頼する場合に使用する場所とは正反対の位置にあって、双方では人の行き来も全くありません。またムスリム用の牛屠畜棟と、ノン・ムスリム用の牛屠畜棟も別棟になっています。各屠畜棟に専用の屠畜人が働いています。私たちが見学した屠畜棟は、ムスリムのために牛を屠畜する専用の屠畜棟で、各工程に

一人ずつ専属の従業員が働いていました。

シャアラム一帯の開発が進む前は緑豊かな森林地帯だったそうですが、近郊で開発が進み自然が破壊され、大気汚染も深刻化してきているとのこと。屠畜用の家畜にも影響が出始めるかもしれないとのこと。地方に移転する準備が進められているところでした。移転計画は2年前に持ち上がり、この1~2年をメドに完全移転するとのこと。そのためこの屠畜場は2年前から最低限必要なメンテナンスしかしていません。

見学当日の朝は、8頭の牛を屠畜しました。ハラール屠畜のために特に留意している点をハラール・クリティカル・コントロール・ポイント（HCCP）といいます。この屠場でのHCCPは、以下の通りとなっています。

（1）牛についての書類

ムスリムから牛屠畜の依頼があると、食肉用の牛をオーストラリアから輸入します。マレーシア国産の牛は、この屠畜場では扱っていません。ハラール屠畜に供される牛は、誕生から屠畜に至るまでのハラール性が確認されていることが必要です。どの農場で生まれ育ったのか、牧場主または飼育担当者はムスリムか、どのような餌を食べていたのか、病歴はなかったか、マレーシアへ輸出される直前の健康検査の結果はどうだったのか、牧場からマレーシアへ輸出されるまでの輸送はハラール性が確認できる牛だけでまわっていたか等についての証明書のすべてが、マレーシア政府が公認するオーストラリア国内のハラール認証団体によって確認されていることが必要です。マレーシア国内では中華系ノン・ムスリムが経営する牧場で飼育されている牛も多く、こうしたハラール性の確認が難しいとのことでした。

（2）スタンング

セランゴール州家畜サービス局本部に運び込まれた牛はムスリム用牛



会場風景

屠畜棟に隣接する係留所に繋がれ、屠られる時を待ちます。ここでは屠畜直前の健康検査はしません。オーストラリアで実施された輸出直前の健康検査の結果を採択し、牛の健康を確認します。(a) 係留所から屠畜棟内の囲い道への誘導、(b) 囲い道の突き当たりにある壁までの誘導、(c) 突き当りの壁に真直ぐ頭をつけると頸の部分を両脇からロックし、約3秒後に上からスタンガンが下りてきて牛の頭部に電撃を与え気絶させます。スタンガンを操作する作業員は、牛が囲い道の突き当たりまで来ると左手に持った先の尖った柄でお尻を突きながら慎重に、牛の頸が真直ぐロックの位置に来るように誘導し、ロックのスイッチを入れます。このタイミングは非常に微妙で、同じところを8回見ましたが、なかなか簡単に真似が出来そうなテクニックではありません。牛が気絶してガクリと前足を畳むようにして腰を落とすと、暫くして横の壁が上がり、牛はごろりと下に落ちます。

(3) ザバハ

気絶した牛が落ちたところに、ザバハ（イスラームの教えに従って、家畜の頸の定められた部分を、定められた方法によって切断すること）をする人がナイフを持って待っています。気絶した牛がまだ生きていることを確認してから「バスマラ」と「タクビール」を唱えて、ザバハを行います。以下で述べる採血が終わったら、スタンピングされた次の牛が落ちてくる前に、水道水で血をきれいに洗い流します。

(4) 採血

ザバハをすると、頸部から勢いよく噴出している血をビーカーに採ります。この採血は医師免許を持った厚生省の職員が2名で行います。2人はザバハをするまでは、屠畜棟の入り口近くに準備して控えています。ザバハをすると、直ぐにビーカーを持って牛に駆け寄り採血します。この血液を屠畜場内の検査室に運び、病気を持っていないか検査します。

(5) 完全放血と頭部切断

採血が終わった牛は、片足首に枷をはめてレーンに吊り上げ、ザバハの場所から少し移動します。ムスリム用の牛屠畜棟には、一本のレーンしかありません。スペースの都合で、同時に3頭の牛を吊るすのが限界と言っていました。放血中は絶えず水をかけています。放血が完了すると頭部を切断し、レーンに吊るしたまま屠畜棟の別スペースへ移動します。ここまでが屠畜の依頼を受けたサービス局の責任で行われます。その後の皮剥ぎ、解体、内蔵摘出・洗浄等は、同じ屠畜棟内でハラール屠畜専門家の監督の下、屠畜依頼主の責任で行われます。

以上が同屠畜場でのハラール屠畜のプロセスです。製品として出荷するミートのハラール認証となると、ここで描写したプロセス以外にも、パッキングの包材と方法、完成品を保管する場所と方法、出荷方法等についてもハラール性の証明が必要になります。

蛇足になりますが、州都シャアラムと言えば、日本語教育に力を入れ、多数の留学生を日本に送り込んでいることで知られるマラヤ技術工科大学が有名です。私たちが訪れた屠畜場の近くに、このマラヤ技術工科大学の観光学部付属ホテルがあり、そこではちょうど、RISEAP主催のムスリマ（女性イスラーム教徒）のためのトレーニングコースが開催されていました。

JAKIMハラール・ハブ部訪問

JAKIMはマレーシア国連邦政府総理府のイスラーム関連部門です。マレーシアはイスラームを国教としており、ハラール認証も政府の一部門であるイスラーム開発局が行なっています。拓殖大学イスラーム研究所はJAKIMと良好な関係にあり、3年前にハラール・セミナーを拓殖大学でおこなった時にも、当時のハラール部長と同次長の2名が来校されたことがあります。今回はJAKIMの組織改編で従来のハラール担当部がハラール・ハブ部となりました。

シャアラムのセランゴール州家畜サービス局本部からペタリンジャヤのワンワールド・ホテルに一端戻ってから、武藤先生、遠藤先生と私はマレーシア国連邦政府総理府・イスラーム開発局（JAKIM）ハラール・ハブ部のザイナルアービディーン部長に面会するため、ユースフ少佐と共にサイバージャヤに向かいました。クアラルンプールから行政機能を地方に移転する計画は、現在のクアラルンプール国際空港の建設計画と共に進められました。そして今から約10年前、クアラルンプールの中心地と国際空港の建設地であるセパンの丁度中間に当たる場所に、

プトラジャヤという名の都市の建設を始めました。現在、マレーシア国の行政機能はクアラルンプールからこのプトラジャヤに移行しています。

JAKIMもプトラジャヤに移転していましたが、ハラール・ハブ部は2ヶ月前にプトラジャヤからサイバージャヤに移ったといえます。しかしここも、JAKIMとして独立したビルが完成するまでの仮の事務所だとのことです。サイバージャヤはプトラジャヤに隣接した町です。最新テクノロジー産業の中心地を目指して、現在も開発中の都市です。

マレーシアはイスラームに関連する産業の発展に特徴があり、そうしたイスラーム産業においては国際的なリーダーシップを持っています。その中でも特に重要なものがハラール認証とイスラーム金融で、マレーシアは両者の発展に国命を賭けているとも言われています。今回の世界ハラール評議会総会に参加した各国のハラール認証団体の代表も、多くが同部長に面会を求めていました。宗教法人日本ムスリム協会、拓殖大学イスラーム研究所、RISEAP、JAKIMは相互に信頼・尊敬し、また協力し合える親密な関係にあります。終始和やかな雰囲気の中で、イスラーム活動やハラール認証について意見や情報の交換をし、1時間の面談時間はあっという間に過ぎてしまいました。

ザイナルアービディーン部長も宗教法人日本ムスリム協会と拓殖大学イスラーム研究所が行っているハラール認証を高く評価してくれました。JAKIMではハラール・ハブ部に4つのハラール基準監視チームを作り、年明け早々から、手分けして世界各地のハラール認証団体を訪問して、国際的に認知され得るハラール認証のスタンダードが遵守・履行されているのかを視察すると共に、ハラール認証についての啓蒙促進を始めるそうです。ザイナルアービディーン部長自らが来日を希望されたため、拓殖大学イスラーム研究所も歓迎の意向を伝えました。

まとめ

今回の世界ハラール評議会総会に参加して、日本ではハラール認証についての基本的な理解がまだまだ十分でないと感じました。

ハラール認証は、イスラームの教えに基づいて合法であるということを確認するものです。今回の総会の中で、ある参加者が、クローン牛のハラール性について早急に見解をまとめる必要があることを指摘していました。目覚ましい食品産業界の科学技術の発展に伴って、今までハラールでしかあり得なかったようなものが、ムスリム消費者にとっては疑義あるものになり、さらにはハラールでないものになってきてしまいます。こうした現実の変化に対応する

よう、世界ハラール評議会でも、各委員会の中でも、特に技術委員会とシャリヤ委員会との役割と活動を重視しています。

またハラール認証を発行するためには、専門的な知識と経験が必要であるとの認識が、憲章採択に際して確認されました。例えば牛肉のハラール認証を発行する者は、ハラール屠畜の専門知識と豊富な経験を自ら持っている必要があります。調味料のハラール認証を発行する者も、調味料製造の専門知識と豊富な経験を持っている必要があります。今回の総会でも近年の目覚ましい食品技術の進歩によって、次々と新しい問題が生じてきているという報告がよく出ていました。今回採択された基準も、次回には検討し直さなければならないかもしれません。人々の食生活の進歩と向上に合わせて、ハラール認証に携わる者も常に新しい情報を収集し、ハラール製品を製造する企業に対し、製品のハラール性を維持するために適切なアドバイスをしていく責任があることを強く感じました。世界のどこに出しても認められるハラール認証を発行するために、拓殖大学イスラーム研究所は宗教法人日本ムスリム協会と連携して、ハラール認証を行っています。

日本に限ったことではありませんが、今回の総会参加者の中でも、コーシャ認証の取得を根拠にしてハラール認証を発行してくれ、という問い合わせをよく受けるという話を何度か聞きました。日本でも、ハラール認証よりもコーシャ認証の方がよく知られていますが、両者は異なります。

ハラール認証は、イスラームの教えに始まり、イスラームの教えに従い、イスラームの教えに完結します。イスラームに対する理解なしに、ハラール認証はあり得ません。この点はハラール認証の取得を希望する企業の方々にも、十分承知していただきたいことです。そしていつも願っていることはこのハラール証明がきっかけになりイスラームの理解が広まっていくことです。



JAKIMハラール・ハブ担当部長と

ウズベキスタン旅行記 (2)

金沢工業大学講師 村中博文
(拓殖大学大学院国際協力学研究科第一期生)

第4日目 (8月13日(月))：ブハラ～シャフリサブス～サマルカンド)

いつものとおり午前6時起床、7時半から8時半にかけて朝食をとり、9時過ぎにホテルを出発、アミール・ティムールの生誕地であるシャフリサブスを経て古都サマルカンドに向かった。1時間ほど走ったところで、突然、左後輪がパンクしたので路肩に20分ほど停車してタイヤを交換したほかは順調なドライブを楽しむことができた。

午後12時半、ティムールの生誕地であるシャフリサブスに到着、この町も他の名所旧跡と同じく、2000年にユネスコ世界文化遺産に認定されている。

そろそろさっぱりしたものが食べたいなと思っていたところ、町でとった昼食でラグマンといわれるうどんが添えられていたことにいくぶんホッとした。

午後3時までアミール・ティムール像があるアク・サライ宮殿を見学した。結婚式でにぎわう広場を抜けて宮殿に入ったが、かなり老朽化が進み、タイルの崩落が激しいため、修復中とのことであった。見張台として使われていた38メートルの塔に上がってみると、町全体と彼方にあるザラフシャン山脈を一望できた。ここでは現在モスクとして使われている建物も多いと聞いたが、時間帯が合わなかったのか礼拝している人々を見ることはなかった。

帰りかけ、行き会った人々の中に一時代前の古式豊かな服装に身を包んだいかにも敬虔そうなムスリムと見られる年輩の二人連れを見かけた。ごく自然なたたずまいから、おそらくは現地の老夫婦なのである。長く蓄えたりつばな髭に民族帽、膝まである白い服につま先が反り返ったようなブーツ、そして女性のほうはヴェールをすっぽりと被り、顔を覆っていたのが印象的であった。

その他、ティムール廟や彼の長男が葬られているジャハンギール廟などの見学を終わった後、次の目的地サマルカンドに向けて出発した。車は次第に岩だらけの山中に分け入り、峠に差しかけたところで停車した。ここはタフタカラチャ峠といい、周囲の小高い山々はパミール山系の一部とのことであった。眼下に、いま通ってきたばかりの道路が細くカーブし、数台の車が登ってきているのが見えた。一息入れ終わると今度はゆるやかな下りとなり、中腹に差しかけたところで、それぞれ家の手伝いに働んでいるのかロバに跨った少年、牛を連れた兄弟など行き交い、いくぶん牧歌的な気分浸ったものである。多分、ここに住む人々の生活のほとんどは自給自足によって生計を立て、現金収入に頼ることはほとんどないのだろう。

ほどなく車は平坦な道路に入り、午後4時半、古都サマルカンドに入った。

サマルカンドは、アムダリヤ支流のゼラフシャン川の河畔に位置し、レギスタン広場を中心とした旧市街と新市街のコントラストが調和した「青の都」と呼ばれる美しい都市であり、ここもユネスコの世界文化遺産に登録されている。

まずは、宿泊先のホテル・セントラルサマルカンドで荷物を降ろした。

このホテルも地方都市としては比較的高级、と思っていたのも束の間、外国人専用ホテルにしては冷房は効かず、ボーイはウズベク語しか話せず、フロントも無愛想極まりなく、とてもスリースターの外国人観光客専用とは思えないようなレベルで、他の客もほとんどいない有様だった。

4階の部屋に行く際も、そこまで上がるロシア製のエレベーターが物すごい代物で、ドアの開閉ボタンもスムーズに反応せず、何とか閉まったと思ったら始動時には決まってゴトゴトと不快音と振動を発生し、ブルブル震えながら上下振動したものである。もっとも同乗した多分、イタリア人らしい太った男性などは、両手のひらを大仰に前に広げ、首をすくめながら「オー、ウズベキ

スターン」と言いながらカラカラ笑いこけ、結構楽しんでいたようではあったが……。

部屋は暑かったが、窓を開けると心地よい風が入ってきたため、陽が落ちてからはエアコンなしでも何とか凌ぐことができた。

午後7時から予定されていた夕食をとるため、市内の民家まで出向いたが、ここで最大の失敗をすることになった。というのも夕食に出されたプロフ、つまりピラフと大きいピーマンにぎっちょりと炒めた肉、野菜を詰めた食べ物、かなり油っこくてきついなと首をかしげたものの、手をつけられないのも申しわけないのと日本人的発想の同情心も手伝って口に運んだところ、つい食べ過ぎたようで、早速、翌日朝から頻繁なトイレ通いに悩まされることになったのである。

ともあれこの晩は、午後8時半過ぎにホテルに帰り着き、11時に寝るまでの間、1時間ほどホテル前の公園を散歩した。途中、ホテルわきの交差点で交通整理をする警察官と少しばかり会話を交わしたが、私が日本人だとわかるとニコニコしながら日本の警察官はどんな武器を持っているのかと、このホテルはよいかなどと聞いてきた。一人きりで夜遅い時間にもかかわらず、おまけに丸腰で緊張している様子など全くなく実にのんびりした感じであった。

公園では夕闇の散歩を楽しむ人、ベンチで話し込む人などちらほら行き交ったが、そのうち7、8人の高校生くらいの若い男女の集団と遭遇したが、彼らのいうには日本製品を持ち、日本に行くことが夢だとか、要するにかなり日本に憧れていることがわかった。感心したのは、彼らの明るい表情からは、現在、わが国で問題となっている青少年の非行化などの様子はみじんも感じることができなかったことである。

そういえばウズベキスタンに入ってから目にした現地の人々の姿から感じたことは、誰であれ何かによって動かされているのではなく、すべて自らの意志で動き、ほとんどが自らの境遇を自然に受け止め、ひたむきに生きているということである。ロバにまたがり、幼い兄弟を荷車に乗せて牛の群れを追う少年や少しでも現金収入を得ようと道路脇にうす高くウリやスイカを積み上げて気長に客を待つ一家、ろくに整備もされていない駐車場を管理する老人やトイレにきた外国人観光客から30円程度の使用料を受け取る女性など皆そうであった。

例外として、ガイドのアントン君や公園で出会った少年たちのように高い教育を受け、外国に憧れる人々などが少数ながらその対極にいるが、ひたむきに生きるという点では共通しており、現状に悲観している様子は全く見られなかった。後日、彼にこの点について質したところ、現在我が国で問題となっている引きこもりや若者のうつ病の増加などの社会問題については、日本など先進国でそのような問題が深刻化していることは知っているとした上で、ここウズベキスタンでは全くないと言っているのも印象的であった。

さらに、近年タシケントやフェルガナで起こった騒擾事件は、決して政府に対する反対運動とかテロリストによるものではなく、多分に偶発的な事件であって、凶悪な事件は全くなく、治安もよいと強調していた。そしてウズベキスタンを統治するカリモフ大統領についても、わが国でいうような強権的とか専制主義的政治手法であることは否定しないが、中央アジアでは彼のような強力なリーダーシップを持たなければ国の独立は維持できず、これからの国家運営も成り立たないだろうと言っていたのも印象的であった。

カリモフ大統領については、さらに大多数の国民にとって信頼できる国家指導者であり、権威的であるとして否定する諸外国の見方は偏見であり、ロシアとの関係を重視しながら米国、中国とのバランスもうまくとっていると熱っぽく語っていた。もし国内に好ましくない状況が起るとすればポスト・カリモフ以後であり、また政策の変化が考えられるのは、近い時期では再選しないと言われるプーチン以後のロシアの中央アジア政策によるというのが彼の主張であった。

この日は午後11時に就寝した。

第5日目 (8月14日(火))：サマルカンド～タシケント)

午前6時起床、朝食をとり、9時過ぎにホテルを出発し、サマルカ



タフタカラチャ峠から眼下を望む



アク・サライ宮殿見張台からの風景

ド市内の名所旧跡を見学した。

ここではアミール・ティムールゆかりの霊廟や記念碑などを見て回った。しかし最初の見学先であるレギスタン広場が、毎年9月1日の独立記念日に行われる大統領観閲式の準備で、軍が予行訓練をしていたため立入制限となっていたので、先に隣接する民俗文化博物館に入った。ところがこの辺りから腹の具合が急転直下おかしくなって見学どころではなくなり、トイレに駆け込む始末となった。まさに危機一髪であやうく滑り込みセーフ。こうした公共施設でもトイレ使用料300スム(30円)で、それよりも真っ先にトイレの場所を確認しておいてよかったと冷や汗をかいたものである。

まるで体中の水分が胃に集まり、そのまま直腸に落ちてくる感じで、便意がないときは胃がキリキリ痛むという外地特有の典型的な急性の下痢である。

こんな悲惨な状況の中、またしても前々日に出会ったようなジプシーと遭遇した。同じように汚れた素足で4、5歳くらいの小さい子供の手を引き、マネーマネーと哀願するような声を出して付きまどってきたが、前回同様に早々に退散したことはいうまでもない。

ここで初めてモスクでの礼拝を呼びかけるアザーンを聞いた。かなり遠くで明瞭には聞き取れなかったが、あらためてこの国がイスラーム国家ということを感じたもので、逆にいえばそれだけイスラーム的色彩は強くないといえるのかも知れない。

この日はほかに、往時のサマルカンドがあったアフラシャブの丘に行った。ここではイスラーム天文学のさきがけとして、後の西洋天文学にも大きな影響を与えた天文台で、航海における天体観測で使用する六分儀の原型ともなった巨大な測定儀に驚いたものである。ほかにティムールを葬ったグリ・アミール廟などを見学した。とはいえ、大事をとって軽く見てまわった程度で、トイレや車の近くで極力移動しないようにしていたためあまり覚えていない。

午後になってすぐにタシケントに向かったが、休憩を多くとったことと途中でとった昼食も熱いお茶のみで済ませたことが幸いしたのか、約5時間のタシケントまでの道中は平穩無事で、徐々に回復し、風景を眺めつつ快適なドライブを楽しむことができた。

ウズベキスタンの幹線道路は片側2車線の区間が多く、中央分離帯は低いコンクリートの壁でかなり長い間隔で仕切られており、ところどころに設けられた狭い隙間から人や牛の群などが横断する。しかし、牛の群などがすでに横断している最中であれば、往来する車もスピードを落としたり、停止したりするが、渡り始めや渡り終える際などは実に危ないタイミングとなることは間違いない。

そのほかに車でウズベキスタンをほぼ縦断して気づいたことは、幹線道路が長く続いているところでも、ほとんど給油施設を目にすることはなく、まれにあってもプロパンガスのスタンドであった。聞いてみるとガソリンスタンドは、タシケントのような大都市でも市街地に僅かしかないとのことであった。この国の主要輸出品の一つに石油があるが、多分、そのほとんどが輸出に回されているものと思われる。ちなみにガソリンの小売価格は1リットル当たり500スム(約50円)ということであった。

タクシーに韓国製の車が多いことは前に述べたが、行き交う乗用車は大小を問わず、ほとんどが韓国製で、たまにトヨタ、日産などの日本車を見かける程度であった。バスなどの大型車はベンツなど欧州車、トラックについては見たものすべてがロシアのカマズ製であった。

途中、ちよくちよく道路整備の区間があったが、そこで使われている建設機械などもコマツや日立など日本の重機を目にすることはなく、ほとんどが欧州製しかかった。また道路事情については、幹線道路はほとんどアスファルトが敷かれているものの、さほど平坦でない路面や幅員がはっきりしていない路肩からはあまり良い整備がなされているとはいえないものであった。

道路そのものは、首都のタシケントのみ別格でかなりよく整備され



ウズベキスタン家庭料理

ており、タシケントが近づいてきたことは徐々に良くなっていく道路状態でも知ることができた。

そうこうしているうち、午後5時には滞り初日に宿泊先したタシケント・パレスホテルに着いた。

タシケント市内に入って気づいた

ことは、この都市が日本の都市と比較してもすっきりと見えるのは、あながち敷地やビルの景観のせいだけでなく、おおむね片側3車線となっている道路に、陸橋や横断歩道がほとんどないということが大きく影響していることである。

タシケントにもバザールやメドレセがあり、ホテルに早めに着けば立ち寄るつもりでいたが、遅くなったためホテルで時間を潰し、午後7時から近くの韓国式レストランで夕食をとることにした。ここでは韓式料理がメインなのはもちろんであるが、うどん、寿しなどわずかながら和食もあり、久しぶりにウズベク料理以外の食事を口にすると思ったら、何だかほっとするやらうれしいやらの気分になった。

夕食の席でアントン君から、米をはじめとした日本人や韓国人向けの食材のほとんどは現地生産、輸入を問わず韓国からの投資や技術指導によって現地で生産されるものがほとんどで、日本からの資本投資によるものはないということも聞いた。理由としては、彼の家族のように旧ソ連時代にシベリアから強制移住を強いられた朝鮮系の人々が多く根付いていること、そして農地開発や企業進出においても、日本側がリスク回避によって投資をためらっている間に、韓国系企業の大規模進出と市場独占を許してしまったことが大きいものと考えられる。しかし、と彼は付け加えながら、ウズベキスタンのインフラ基盤はまだまだ整備が遅れており、未開発の分野も数多くあり、彼自身も日本政府からの国費留学生として来年には再び来日し、立教大学で経営学を勉強するとのことであった。

最後の晩ではあったが、翌朝早いこともあって早々に切り上げることにし、9時過ぎにはホテルに戻って荷物をまとめ、午後10時半ごろには床についた。

第6日目(8月15日(水))：タシケント～東京

最終日、いよいよ帰国の日である。午前4時半に起きると、すでに外はかなり明るくなっていた。腹の具合はまだ本調子とはいえず、5時にホテルでパン、ヨーグルトとお茶などで軽めの朝食をとった。

5時45分、迎えにきたアントン君とともにホテルを出る。6時ちょうどにタシケント国際空港に着き、ここでウルゲンチから行動を共にしたドライバー君と別れた。別れ際、彼には謝礼としての100米ドルと、別にサマルカンドで彼の帰りを待っているという二人の子供の土産として10米ドルと日本から持ってきた紙ヒコキや折り紙を渡したところ、すごく喜んでくれた。アントン君とは、日本での再会を約してターミナルのゲートで別れた。ちなみに彼に謝礼として渡した額は60米ドルである。

さて、ここで彼と早めに別れたことで、その後の出国審査で手間取ることになった。というのもウズベキスタン入国時、入国カードに現金持込額を記入していなかったため、ストップをかけられたことである。

つまり、未申告のお金は持ち出し禁止だというわけで、この場合その金の処理をどうすればよいのかについてさっぱり要領を得なかったことであり、その辺の売店で使ってもダメだという。女性係官相手に下手なロシア語で悪戦苦闘しているうち、幸い同じ便で日本に行くという日本語堪能なウズベキスタン女性が50米ドルを払うことで話を付けてくれ、無事に出国ゲートを通過することができた。

旧共産圏ではよくあるらしく、こうした場合であっても出国させないことはまずないとは聞いていたが、何のことはない、つまりはあれこれ理屈をつけてリベートを要求する手口の一つなのかも知れない。それにしても、うかつにも原因を作ったのはこっちであり、入国時のリストは厳密に書くべきと反省したものである。

ともかく搭乗機のウズベキスタン航空527便は定刻どおり、午前8時20分に離陸した。

離陸後いっとき経ってから、彼女が持っていた本にはさんだ私の日本円と米ドルを、もう大丈夫とばかり返してくれた。謝礼の意味でいくばくかの日本円を渡そうとしたが、笑いながらとんでもないと固辞するばかりであった。機内では腕時計を元どおり4時間進めた後、ジュースをもらおう意外何も食べず、タシケント～東京間6,048Km(3,758ML)の7時間45分をほとんど寝っぱなしのまま過ごし、日本時間午後7時55分成田に無事到着、有意義な旅を終えた(おわり)。



グリ・アミール廟で

拓植大学イスラーム研究所 平成19年度第一回イスラーム講演

『イスラームにおける二大祭』

拓植大学イスラーム研究所 客員教授 有見次郎

はじめに

今年度の第一回目のイスラーム講演会が10月6日(土)午後2時より文京キャンパスF館で開催された。今回はイスラームの断食月にあっていたので、それに関連してイスラームの二大祭について有見先生に話していただいた。ここにその一部を御紹介する。

本日は、イスラームのイードルフィットル 断食斎戒明けの祭り 10月1日(ヒジュラ歴、以下同じ)とイードルアドハー 犠牲祭 12月10日の祭りについて講演します。

まず、二つの祭りのための礼拝について共通していることは、ファジュル(夜明け前の礼拝)の礼拝後に礼拝が行われその後説教があります。説教を伴う礼拝は通常金曜の集団礼拝であり、説教の後で礼拝となるとところが異なるのです。また二大祭の日の礼拝に集った信徒らは、イマーム(導師)が登場して礼拝の始まるまでアッラーを称えズィクルを唱えながら待ちます。礼拝の仔細については他に譲るとして、祭りの日に信者に勧められることは何かと言えば、預言者の慣行に従えば新しい衣服を着ることやマスジドへの道を行き帰りで遅れることなどが伝えられています。余談ながら我が家の習慣として、新年には下着からすべて新着物を着せられた記憶があります。

さて、**スィヤーム**または**サウム**(断食斎戒)について話しましょう。基本的なことながらすべての行動にはニーヤ(意思決定)が必要なことはいまでもありません。例えばニーヤの意識なくして昼過ぎに起き上がり、あと数時間でイフタル(明けの食事)となるため便宜上サウムをしていることにすることなどは、到底許されないのです。

サウムが義務となるのは、シャリーアでは成人のムスリム、ムスリマであり、健常者が対象となっています。

「信仰する者よ、あなたがた以前の者に定められたように、あなたがたに斎戒が定められた」(クルアーン2章183節)とあります。

期間については、イスラーム暦第九月ラマダーンの新月の確認から29日または30日間となっています。陰暦のため28日や31日の日数はありません。

開始時刻は、ファジュルの礼拝のアザーン(礼拝の呼びかけ)から始まります。

イムサーク(飲食の停止)についてクルアーンには次の明文があります。

「白糸と黒糸の見分けられる黎明になるまで食べて飲め。」(2章187節) 黒糸と白糸を用意した男のエピソードが伝わっているものの、現在はアザーンの時ということを知者は周知しているのです。

ではいつ飲食が解禁となるのか。その時刻は、毎日マグリブ(日没直後の礼拝)のアザーンが流れる時刻となります。ムスリム諸国では、空砲が鳴り響き時を知らせています。イフタル(サウムの解禁)の時は水分補給と、簡単な食事にナツメヤシなどを食してから礼拝を行うのです。

サウムを免除される場合については、病人である場合、生命を自ら絶つことがあってはならないためであり、旅人については自宅での日常生活が基本となるため、移動距離がおよそ80K以上(マッカとジェッダの距離)になれば免除されるのです。また妊婦、授乳中の女性であれば胎児や乳幼児への深刻な影響があるためであり、生理で出血のある場合も同様に免除され、高齢者、虚弱体質者についても免除されているのです。

ラマダーン期間中の徳目については、クルアーン読誦を日々行い、慈善行為に勤しみ誹謗中傷や欲望を避けることなどが勧められています。

またラマダーン期間中には、タラーウィーフという夜の礼拝(イシャー)後に行われる礼拝があります。また20日を過ぎた奇数日の27日にはライラトゥルカドゥル(みいつの夜)があります。イウティカーフ(お籠り)というマスジドに寝起きして一心に行に専念する姿も見られます。サウムの方法について話は進められていますが、サウムを完成させるために忘れてはならないことに、ザカート(フィトル)という喜捨を10月1日の朝の祭りの礼拝前までにしなければなりません。両手のひらに4杯分(2サーア)の穀類を喜捨することが定められていますが、日本では相当額として1500円を拠出しています。これは一年を単位として算出されるザカートではなく家族の人数分が対象となっています。

サウムを行えなかった場合の償いについては、故意の場合には2ヶ月間のサウムや、貧者60人に食事を与えるかしなければなりません。

その他の断食斎戒として勧められているのは、翌月10月の6日間、イス

ラーム月1月のアーシュラーの日、毎月の13、14、15などに預言者はサウムをしていたと伝えられています。また自発的にサウムを任意に行う場合、その曜日は、月曜日か木曜日が勧められています。

禁じられる断食斎戒は、二大祭の日があり、また一ヶ月を超える期間のサウムは習慣性を生むとして禁じられているのです。

さて次に**ハッジ**(マッカ巡礼)について話す前に、イスラームで義務となるのはマッカ巡礼であり聖者廟詣ではありません。

マッカ巡礼の期間は、マッカとアラファートの間で12月8日から13日までの5日間行われます。

つまり定められた日に定められた儀礼をマッカの(カアバのある)ハラームマスジドとその周辺の地域で果たす儀礼なのです。すべてのものを犠牲にしてアッラーに帰依するという重要な儀礼を具現するわけです。

「この家への巡礼は、そこに赴ける人びとに課せられたアッラーへの義務である」(3章97節)

「ハッジとウムラを行う者は、アッラーの許へ参集するためにマッカへ来る者たちである。もし巡礼者達が、この時アッラーに何か祈願すれば、アッラーは必ずそれにお答えになり、また罪の赦しを乞い願うならば、アッラーは必ずその罪を許される。」(ハディース)

巡礼者を行うためには、成人のムスリム、ムスリマであり、健常者、負債の無いこと、旅費(往復)、留守宅の生活費の確保することなどが義務となります。

また巡礼着のイヘラームの着用が義務となります。イヘラームにはアッラーに帰依するという心身両面の状態を意味することでもあります。

巡礼に着用する布は、縫い目の無い二枚の布で身を包むのです。これは死装束でもあるのです。

着用後の禁止事項については、あらゆる欲望、快楽の追及を慎まなければなりません。儀礼終了までは平服の着用が禁止されます。

着用後は貴金属装身具の着用禁止。香水、髭剃り、櫛で梳くことの禁止や、爪切り、夫婦間の性的関係、口論、粗野な振る舞い、殺生、狩猟、異性の話に耽ることなどがあります。

ミーカートという着用地点があり、これらの地点までには着用が義務づけられているのです。

ジュフファ=エジプト、シリアからの巡礼者

ズルフライファ=マディーナ方面から

ザートイルク=イラク方面から

カルヌルマナーズイル(サイル)=リヤド、クウェート、湾岸方面から

ヤラムラム=イエメン方面から

巡礼儀礼について言えばタワーフ(カアバを左回りに7回すること)、サイイ(サファアの丘とマルワの丘を小走りを交えて3往復半する儀礼)をマッカ到着時に行います。

「本当にサファアとマルワは、アッラーの印の中である。だから聖殿に巡礼する者、または(小巡礼のためにそれを)訪れる者は、この両丘をタワーフ(回巡)しても罪ではない。進んで善い行いをする者には、本当にアッラーは嘉し、それをよく御認め下さる。」(2章158節)

タワーフには三通りありタワーフルクドゥーム(到着時の儀礼)、タワーフルイファダ(巡礼儀礼中)、タワーフルウィダーア(マッカを立ち去る前)に行います。

またアラファートの原野を目指し到着するまでタルビヤを唱えます。ラッパイカッラーフンマ、ラッパイク(おおアッラー、御前に、、、)

アラファートに到着後はウクーフ(アラファートの原野での祈念、祈祷)を行います。そして日没後アラファートと宿営地のミナーとの中間点のムズダリファで礼拝後70個の小石を拾い集めミナーの谷で石投げの儀を行うのです。その後剃髪をし犠牲を捧げます。

それは12月10日であり犠牲祭になり巡礼に参加できなかった世界中の教徒達もその日を祝うのです

その他には身代わり巡礼として家族、知人、死者の代理に巡礼経験者は代理になることもできます。

以上のことを参考までにこれからビデオを御覧頂きます。



講演風景

ハディース入門 (9) – ハディースの伝達方法(つづき)

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程 大木博文

ハディース伝達の拠点都市

イスラーム世界の拡大に伴い、多くのサハーバ(教友)やタービウン(サハーバの次の世代)たちがマッカ、マディーナを離れて各地に移住していった。それによりハディース学の中心都市またはハディース伝達の拠点都市として知られるところも各地に出てきた。多くのハディース学徒が知識を求めて訪れた場所として、特に以下の諸都市が挙げられる。

マディーナ: ムハンマドが預言者としての後半生を過ごした地で「光に照らされた町」、「預言者の町」と呼ばれる。大半のハディースがこの地に発し、イスラームの法的規範の多くがこの地で生まれた。サハーバの多くもこの地で預言者と行動を共にし、預言者の没後も多くはこの地に残った。イブン・サードによれば「マディーナに移住してバドルの戦いに参戦したサハーバの中で預言者の没後にマッカに戻った者はアブー・サブラー人だけで、サハーバは彼の行為を嫌悪した。」とある。マディーナでハディースを伝えた主なサハーバには、いわゆる正統4大カリフ、アブー・フライラ、預言者ムハンマドの妻アイシャ等がいる。また主なタービウンとしてイブン・シハーブ・アッズフリーを挙げることができる。

マッカ: 預言者ムハンマドによるマッカ征服の後、ムアーズ・イブン・ジャバルがマッカの住民のイスラーム教育を担当した。アブドッラー・イブン・アッパースやアブドッラー・イブン・ウマル等がマッカでムアーズからハディースを伝聞している。マッカがイスラーム学本山の一つとして名を馳せるのは、サハーバの一人であるアブドッラー・イブン・ウマルがバスラより帰郷してからのことである。タービウンのうちでは、アブドッラー・イブン・アッパースの解放奴隷であるイクリマ等が知られる。

クフファ: イスラームの東方進出の拠点として発展したクフファには、サード・イブン・アビー・ワッカースを始め多くのサハーバが移住した。中でもハディースの伝達に最も大きな功績を残した者はアブドッラー・イブン・マスウードである。クフファを訪れて彼からハディースを伝聞したタービウンとして、マスルーク・イブヌル・アジュダウ・アルハムダーニー、サイード・イブン・ジュバイル等が挙げられる。

バスラ: バスラにおけるハディース伝達のリーダーと讃えられる人物は、サハーバの一人、アナス・イブン・マリクである。タービウンではアルハサン・アルバスリー、ムハンマド・イブン・スィーリーン等がよく知られている。

ダマスカス: シリアがイスラームの勢力下に入ると、第二代正統カリフ・ウマルは住民の教化のためムアーズ・イブン・ジャバルをシリアに派遣した。またクルアーン編纂者の一人として有名なウバーダ・イブヌッ・サーミトやアブッダグダーウ等もシリアでハディースを伝えたサハーバとしてよく知られている。タービウンではアブー・イドリース・アルハウラーニー等がハディースの伝達に尽力した。

カイロ: イスラームの勢力下に入ったエジプトでハディースの伝承者として知られたサハーバの第一人者は、アムル・イブヌル・アースの息子のアブドッラーである。タービウンでは、ムルシド・イブン・アブドッラーやズィード・イブン・ハビーブが特に有名である。

これら以外にも、アラビア半島ではハドラムウトやサヌア、現在のイラクの地ではバグダードやモスル、イランの地ではクテシフォンやシーラーズ、イスファハーン、ハマダーン、タブリーズ、ケルマーン、メルグ、中央アジアではナイサーブル、ホラーサーン、タバリストーン、ジブルジャンとといった諸地方やブハラ、サマルカンドといった諸都市、リビアのバルク、チュニジアのカイラワーン、カルタゴ等がハディース伝達の拠点都市として名を馳せた。

ハディースの探求

どうして初期イスラーム時代のムスリムたちはハディース探求を実践したのか、また彼らはそのためにどれほどの困難を経験したのか、さらにはハディースの伝聞・伝達に際し彼らはどんなことに留意したかについては、すでに「ハディース入門(1)」で簡単に説明した。ここではハディースの伝達方法と関連して、そのハディース探求の目的と結果をまとめておく。

ハディース探求の目的

1. ハディースの習得: 初期イスラーム時代におけるハディース探求の最大の目的は、個人的なハディース習得である。預言者存命中から新たにイスラームに入信した者はハディースを求めて預言者やサハーバの許に赴き、サハーバたちも新入信者たちにクルアーンとハディースを教えるため各地に赴いていった。こうしたハディースを巡るムスリムたちの頻繁な往来が、ハディース探求の旅を促進させたのである。タービウンの時代になると、同じハディースでもムスリムによって異なる表現で暗記していたり、一部分だけを暗記していたり、あるハディースについては知っている者がほとんどいなくなったりしていた。そのため一つのハディースを求めて人から人へ、何ヶ月もかけて旅をするということが常態化するようになった。

2. ハディースの確認: 自分が伝聞したハディースの正しさを確認するため、同じハディースを伝聞した者の許に赴くこともあった。この件に關しては、マディーナに住んでいたアブー・アイユブが「信者が現世で犯した過ちを隠した者について、アッラーは最後の審判の日にその者の過ちを隠してくださる」という一つのハディースを伝聞し、それを知っている者は自分とウクバ・イブン・アミールしかいないということがわかると、ウクバに会ってそれが正しいものであることを確認するためにバグダードまで行ったという逸話がよく知られている。

3. 高い経路の探求: 伝承経路にはその信憑性の程度に高低がある。あるハディースについて複数の経路が伝えられ、いずれも間断がなく信頼できる経路であると認められる場合、経路を構成する伝承者の数が少なければ「高い経路」と呼ばれ、相対的に多ければ「低い経路」と呼ばれる。これはなるべく少ない人数のものによって伝えられたものの方が、内容に間違いが含まれる可能性が低く、信憑性が「高い」ためである。こうしてムスリムたちは、より「高い経路」を求めるようになった。

4. 伝承者たちの素性調査: ハディースと共に、その伝達に関わった者たちがどのような人物であったのかを知ることもハディース伝達の重要な課題となった。その成果が伝承者学や伝承者鑑定法といった学問の確立と併せて、イスラーム独特の人物史や世代学、地方史の興隆につながっていった。

5. 欠陥の解明と批判: 伝えられたハディースに疑義が持たれる場合には、その根拠を明らかにして、それを受け入れないよう他のムスリムに警告しなければならない。このようにハディースを批判的に分析し、その欠陥を解明することもハディース学徒に求められた。

ハディース探求の結果

イスラーム世界がその繁栄の頂点に達したのはアッパース朝第5代カリフのハルーン・アッラシードの治世で、ハディース史ではマリキー派の学祖マリク・イブン・アナスの晩年に一致する。つまり断片的筆録からハディースの編纂に移行した直後の時代で、大編纂時代に移行する前段階の時代と位置づけられる重要な時期に当たる。ハディースに対するムスリムの関心の高まりが、そのままイスラーム文明の興隆を促したともいえるのである。

1. 諸学の興隆: ハディース伝達のためには広大な地域を旅して周り、様々な人々に接し、様々な生活環境に適応していかなければならない。ハディース探求の途上においてムスリムが未知のことについて新たな発見をするたびに、彼らの知的好奇心が刺激され、様々な学問分野が形成され、また既存の学問分野に新たな視点が増えられていった。

2. 知識に基づく文化の伝播: ムスリムたちの行動範囲は大都市部から辺境地域に及び、それに伴って広大なイスラーム世界では、満遍なく先進文化が伝播した。

3. 精神的純化: ハディースの普及は、正しい知識に基づいてイスラームの教えを実践しようとするムスリムたちの精神の純化と高揚に益した。イスラームの功德が各地で高められ、ムスリムは社会的にも個人的にも活性化していった。

まとめ

ハディースについては、論ずべき点が多い。ここまで「ハディース入門」というタイトルの下で、イスラームの多数派であるスンニー派の伝統的な立場に沿って以下の諸点を扱ってきた。

1. ハディースの伝達とその方法について
2. ハディースの改竄について
3. 信憑性の判断基準について
4. ハディースの分類について

これらはすべて、初期イスラーム時代のムスリムたちの中で伝達され、収集され、そして編纂されたハディースに関するテーマである。ムハンマドという人物に帰される膨大な数のハディースは、多くの人々によって、様々な方法で後世に伝達された。それは彼らがハディースを、ムスリムとしての自分たちの生き方や考え方の規範と確信したからに他ならない。ハディースが持つ影響力の強さを信じていたからこそ、彼らはそうした確信に至ったのである。預言者ムハンマドから発せられて、正しく後世に伝えられたハディースは多々ある。その一方でハディースといいつながら創作、偽作、改竄されたものも確かに存在する。自分たちが信じるべきところのハディースは誰によって、どのように伝えられたのか。それは正しいものなのか。そうした疑問に答えようとした彼ら自身の努力とその結果を、ここまで紹介してきた。

次回からは、様々な視点から「どうしてムスリムたちはハディースを信じているのか」という点を検討した上で、ハディース編纂の歴史と内容、そしてハディースの研究と批判について検討していく。ハディースを信じるということは、ムハンマドを信じるということである。初期イスラーム時代の人々は、特に預言者ムハンマド時代のマッカ、マディーナを中心とするアラブ人たちは、どうしてそのようなことを信じていることができたのだろうか。彼らがハディースを信じる要因を様々な観点から検証し、その後でハディースに対する批判に彼らがどのように対応したのかを概観していく。

コラム

ムハンマドとイスラームの誕生(2)

3-イスラーム以前のアラビア・宗教的状况

(1) ジャーヒリヤ時代：イスラームの時代区分によると、アラビア半島における5世紀後半からムハンマドのイスラーム布教までの一世紀有余は「ジャーヒリヤ時代」（無明時代）といわれている。このジャーヒリヤ時代は、アラブ遊牧民族がアラビア半島のほとんどを占めていた。

(2) 英雄時代：ジャーヒリヤ時代はしばしば「英雄時代」とも呼ばれる。その特長は遊牧部族どうしの戦いと長い詩カシダである。遊牧部族の誉れや価値観をそれぞれの部族の詩人がおおいにうたいあげていた。定住よりも遊牧をよしとし、ラクダを駆って掠奪する勇気と力を賛美し、旅人を持て成す気前よさを最高の美德とする遊牧民の価値観が当時のアラビアに定着していた。

(3) 部族民の連帯意識：そして、遊牧民の重大な特色は、アラブの部族意識の根底にある共通の祖先から出たという血縁意識であった。この血縁による部族の連帯意識は彼等の中に非常に深く根付いていて、部族内にいる者たちは互いに保護すべきことを神聖な義務としていた。この血縁こそが彼等が服従する唯一の権威であった。

のちに、ムハンマドは万人の平等と同僚性に基づくイスラームの理念をかかげて、この部族の慣行を壊滅し、血の結末に決然と挑んでいったのであった。

(4) 多神教・偶像崇拜：当時のアラブの宗教は多神教・偶像崇拜であり、神々や精霊が偶像や自然物にも宿ると信じられていた。ヒジャーズ地方南部の宗教的中心地となっていたのがメッカである。メッカの中心にあるカアバ神殿にはその内と周りには多数の偶像が安置されていた。この地方で非常に崇拜されていたのが、アッラト、ウッザー、マナートの3女神である。この3女神は至高神アッラーに従属するものであった。アッラーはメッカのカアバ神殿の主とされ特別の地位が与えられていた。ジャーヒリヤ時代のこの多神教・偶像崇拜の至高神アッラーを万物の創造主・唯一神アッラーへとムハンマドは移行させていったのである。メッカのカアバ神殿には巡礼期間の神聖月にアラビア半島の各地から多くの巡礼者が訪れていた。この神聖月の間は部族間の戦闘は一切禁止され、巡礼者を対象として定期市が開かれた。

このようにジャーヒリヤ時代のアラブの間では多神教・偶像崇拜が支配的であったが、イエメンやヒジャーズ地方にはユダヤ教徒やキリスト教徒もかなり住んでいた。彼等の影響により多神教・偶像崇拜の中にありながらも、アラブの中にも一神教的なものを求める者たちもいた。この者たちはハニーフと呼ばれていた。

4-クライシュ族とメッカの繁栄

(1) クライシュ部族—北アラブ系のキナーナ部族の支族

預言者ムハンマドを生み出したクライシュ部族は北アラブ系のキナーナ部族の支族であり、ムハンマドの11代まえの祖先クライシュを共通の祖先としていた部族である。クライシュ部族はメッカの東方の山地で遊牧生活をしてきたが、5世紀の末頃ムハンマドの5代前の英雄クサイイに率いられメッカを征服し、遊牧生活を捨てて定住生活を始めた。クライシュ族がメッカを征服した頃には、すでにメッカの中心にはカアバ神殿があり、そこに人々が巡礼を行なう宗教の町であった。

(2) 英雄クサイイによるメッカ征服：5世紀の末

メッカを完全に征服した英雄クサイイはクライシュ族の族長として実権を握っていた。しかし、次の世代には利害の対立が生じ、クライシュ族は2分し、ムハンマドの頃にはほぼ20ほどの氏族に分かれ、それぞ

れに独立した組織を形成していた。

(3) 遠隔地通商：メッカの繁栄

通商路の重要な中継地点であったメッカの地の利を活かし、クライシュ族は遠隔地通商に乗り出し、ムハンマドの3代前のハーシムによって遠隔地通商が組織化されると伝えられている。クライシュ族はアラビア半島の通商貿易を独占する形となり、メッカは商業の町として一層繁栄していった。しかし、その貿易により巨額の富を得るのは一部の大商人だけであった。預言者ムハンマドの生家ハーシム家はムハンマドの3代前のハーシムの子孫がつくった一つの集団であり、英雄クサイイの直系子孫の氏族であり谷間のクライシュのなかでも名門であったが、ムハンマドの時代には、あまり経済的実力を備えてはいなかった。

メッカはクライシュ族の遠隔通商の成功により商業・宗教の大中心地として発展していったが、クライシュ族の人々の間では現世主義や物質主義が蔓延り、アラブ古来の部族伝統や価値観が徐々に消えていき、氏族間の相互扶助精神もすたれ、貧富の差が大きくなっていった。

当時のメッカにはクライシュ部族民のほかに、奴隷や解放奴隷(マワーリー)やクライシュ部族の客人のような同盟者(ハリーフ)がいた。

研究会報告

【平成19年度第3回タフスィール研究会開催】

今年度第3回目のタフスィール(クルアーン解釈)研究会が、2月29日2時より文京キャンパスF館で開催された。今年度はクルアーン第3章を6回に分けて読んでいる。今回は当研究所シャリーア委員会委員の遠藤利夫氏が64節から97節までを読み解説した。今回は預言者イブラヒーム(アブラハム)が特に、ユダヤ教でもなくキリスト教でもなく、イスラームと同じ純粋な一神教の信仰を説いた預言者としての重要性について語られた。

محتويات العدد

1. تقرير الاجتماع العام لمجلس الحلال العالمي
طالب دكتوراه بجامعة ملايا أكاديمية الدراسات الإسلامية :

هيروفومي أوكي

2. محاضرة عن العيدين في الإسلام

أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة : جيرو أريمي

3. مقال : رحلة إلي أوزوبكيستان (2)

المدرس المحاضر بجامعة كانازاوا : هيروفومي موراناكا

4. مدخل الحديث (9) أسلوب تواتر الحديث

طالب دكتوراه بجامعة ملايا أكاديمية الدراسات الإسلامية :

هيروفومي أوكي

5. كلمة النشرة: السيرة النبوية (2)

أخبار المعهد: الدورة الثالثة لدراسات التفسير (3)